
研究活動報告

第21回国際老年学会 (アメリカ・サンフランシスコ)

第21回国際老年学会 (The 21st IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics, San Francisco, USA) が、アメリカ・サンフランシスコ市にある複合施設モスコニー・センターで開催された。期間は7月23日から27日までであり、テーマは「グローバルエイジングと健康：研究・政策・実践をつなぐ」であった。学会では、基調講演、シンポジウム、特定テーマセッション、口頭セッション、ポスターセッション等が行われ、アメリカをはじめ世界各国・地域からの参加者が活発な議論を行った。当研究所からは、小島克久情報調査分析部長が参加し、“Determinants of Caregiving by Children to the Frail Elderly Living Alone in Japan, Korea and Taiwan” (金貞任と連名・ポスターセッション) を報告した。

なお、本大会は4年に1度行われており、次回は2021年にブエノスアイレス (アルゼンチン) で開催される予定である。(小島克久 記)

人口統計のハーモナイゼーションに関するセミナー

社人研一般会計プロジェクト「人口と社会保障における統計の新たなトレンドに関する研究」では、2017年8月10日、米国ミネソタ大学人口センターのマチュー・ソベック (Matthew Sobek) 博士の来日の機会を生かし、一橋大学と共同で、「IPUMS センサスマイクロデータにおける世帯・家族構造のハーモナイゼーションについて」と題する研究会を行った。IPUMS については、すでに2014年11月10日に、ロバート・マッケイ教授による特別講演会を社人研にて行っているが、今回は特に、配偶関係、世帯構成の標準化・共通分類の手法について詳しい説明が行われた。未だ日本の国勢調査データはIPUMSに掲載されておらず、日本の研究者は他国のセンサスデータを使うだけであるが、そのデータベースは日々拡充されている。(林 玲子 記)

ホーチミン高齢化マルチステークホルダー・フォーラム

2017年8月15日 (火)、ベトナム・ホーチミンで、「持続可能な成長のための健康長寿社会への投資」と題するマルチステークホルダー・フォーラムがAPEC 第3回高級実務者会合関連イベントとして開催され、筆者は第3セッション「ケア人材の国境を越えた移動と能力開発に関する地域アプローチ」のモデレーターとして参加した。このフォーラムは、日本政府、ベトナム政府、人口と開発に関するアジア議員フォーラム (AFPPD)、東アジア・ASEAN 経済研究センター (ERIA)、ヘルプ・エイジ・インターナショナル、日本国際交流センター (JCIE)、日本貿易振興機構 (JETRO) の共催によるもので、今後進行する人口高齢化に対してAPEC地域、アジア諸国でどのように対応するか、特に介護システムにおける地域の役割、ケア人材の国境を越えた移動と能力開発について、参加各国の報告をベースに議論が進められた。ケア人材については、インドネシア、スリランカ、フィリピン、ベトナムの事例が紹介され、いずれも介護人材育成制度は整いつつあるものの、量・質ともに不足し

ており、また養成されても海外へ頭脳流出することも多く、資格の国際的な調整や送り出し・受け入れに係る二国間協定の必要性が指摘された。高齢化が進んでいるとはいえ、経済水準の格差、貧困問題は、国内でも国際的にも、変わらず存在しており、国際的な協調が必要であることも強調された。

会議翌日は、ホーチミンから80kmほど南下したところにあるベンチェ省の社会保障センターや高齢者地域組織を訪問した。社会保障センターは貧困で身寄りのない高齢者や寝たきり高齢者が居住する公的施設で、人口140万人のベンチェ省唯一であるこのセンターの入居高齢者は52名ではあるが、このような施設が全国の各省に、合計400箇所程度あるという。高齢者地域組織として、人口高齢化に関する国際 NGO のヘルプ・エイジ・インターナショナルが支援している「世代間相互扶助クラブ」を訪問したが、健康づくりやボランティアによる訪問介護、所得創出マイクロファイナンスなどを行っているとのことであった。アジアでこそ、アクティブ・エイジングが必要とされ、またそのための地域力は高いのではないかと考えさせられた。また、ホーチミンからベンチェ省へはメコン川を渡って行ったが、その橋は2009年に建設されたもので、それ以前は船で行き来していたとのことである。インフラの整備に応じて急速に社会が発展する只中で、高齢化も進展しているわけである。

(林 玲子 記)

日中韓印数理生物学コロキウム

平成29年8月23日～8月26日にインド数理生物学会が主催し、Indian Institute of Technology (IIT) のカンプール校で開催された日中韓印数理生物学コロキウム (CIJK2017) は日本、中国、韓国、インドの4カ国の数理生物学会が初めて合同で行う国際大会である。もともとこの国際会議は日中韓数理生物学コロキウムとして2年毎に開催されてきた数理生物学の会議にインド数理生物学会が加わったものである。今回の初参加国であるインド側の雰囲気は、全体的には生物や社会科学に関する数理科学研究というよりは物理数学などをも含む応用数学全般といった印象であった。これは日本数理生物学会が400人程の数理生物学者（数理人口学者を含む）を抱えているのとは対照的に、インドにおける数理生物学研究がまだ発展途上である事を露呈している。しかし、今回目立ったのはインド側の参加者の多くが若い大学院生であったことで、この国の数理生物学に関する将来の伸び代は非常に大きいと痛感した。

本コロキウムにおいて、著者は宮崎大学の今准教授が主催するミニシンポジウム “Dynamical Systems with application in Biology” にて “Structured population models for two fold stochasticity: heterogeneity and variable environment” というタイトルで、個体差と環境変動二つの性質を持つ構造人口モデルに関する解析結果を招待者として報告した。確率論を用いたこの手の研究はインドの数理生物学会では少なかったが、質問や議論がととても積極的であったのが印象的であった。

最後に、このような素晴らしいコロキウムに参加させていただける機会を与えてくださった今准教授、コロキウムを主催してくださった Prof. B. V. Rathish Kumar, Prof. S. Ghorai, およびコロキウム事務局関係者に感謝したい。

(大泉 嶺 記)

第27回日本家族社会学会大会

2017年9月9日、10日の2日間、京都大学吉田キャンパスにおいて第27回日本家族社会学会大会が